

る。

本書を読んで感ずる事は安南は古來印度支那半島の中で最も威を振つた國であるとは言へ内には弑虐篡奪の慘事が多く或ひは支那に屬し或ひは二三代の短い王朝の交迭が續いて遂に完全な佛國の植民地となつて自から立つ能はざる如き狀態に至つた。これを救ふものは外部からの正しき誘掖と安南民族自からの覺醒とである。而もこれが完遂は日本の力に俟つの外はない。日本が亞細亞の指導者なるべき事は何人も信じて疑はない所である。また國家の總力をあげて着々達成に邁進しつつある所である。然し翻つて思ふに一方南方に赫々たる戰果をあげつつある秋に當つて、一方我國の文化をそこに及ぼすべき充分な用意が出来てゐるであらうか。言ふまでもなく専門家にあつては充分の研究がとげられてゐてそれ故に今日の成果を收め得たものであらうが、國民總體としての認識は如何であらうか。近時目覺ましい皇軍の活動に伴つて國民の關心が南方に高まり、世にこれに關する群書の流行を見るが、大方は南

方事情の紹介や經濟調査の報告に止るものが多い。而も少しく研究的なものになると殆んど歐米人によつてなされたものの翻譯である。東洋研究に絶好の立場にあり又重大な使命を負ひながら今になつて翻譯の域を脱しないのは正しく立廻れの觀があるものではないか。建設は永遠であり、研究は不斷に行はねばならぬ。昨今諸方に南方文化研究の會が興されるのを聞くが、一日も早く本書の如き眞摯な學問的良書の多く世に出づる事を衷心より望むものである。(昭和十六年八月富山房發行A5四九四頁七圓)

(木村)

研究室彙報

眞宗學研究室

○新入會員歡迎會 五月四日午後四時
於黎明會館樓上、出席者關根學長、金子、安井、加藤、稻葉、日野、桑谷、松原等の諸教授以下學生三十名參加、研究室より禿教授、雨森、長谷川出席

司會、盛會裡に今年度の希望を語り合ふ。

○第一會例會

一、五月二十八日午後三時 於第一教室 講師 金子教授の『解學と行學』を聞く。出席者、稻葉、山田契、正木、桑谷、松原の諸教授、自見河野長尾本田等の諸幹事以下三十餘名、研究室より禿教授、雨森、長谷川出席司會。

○史蹟見學旅行

一、六月六日、七日(五日午後十一時 京都驛集合)

一、越前眞宗四ヶ本山、永平寺、吉崎別院等見學(福井別院にて一泊)

一、參加者、曾我、禿兩教授引率、長谷川副手以下學生二十五名、日野教授特別參加、極めて愉快な踏査を終る。

佛教學研究室

昭和十七年度印度佛教學學界
新任教授及び新入生歡迎會
日時 五月十三日午後五時ヨリ
場所 河原町丸田町角 東洋亭

出席者 山口、山邊、泉、江部、龍山、

舟橋、野澤教授

佐々木教悟、研究科二名、學生

八名

例會

日時 五月二十七日午後三時より

講題 阿含に於ける緣起の二面に就て

講者 舟橋教授

場所 第十一教室

出席者 山口教授、佐々木現順、佐々木

教悟、研究科三名、學生八名

第二回例會

日時 六月二十四日午後三時

講題 「ラトナーバりに就て」

講者 和田秀夫氏

場所 第十一教室

出席者 山口、西尾教授、佐々木教悟氏

研究科三名、學生五名

◇大乘佛教學會

六月五日(金) 午後五時半より 東洋亭

にて

山邊、江部、山田契先生及び新入生歡

迎懇親會を開く

山邊、山口光、曾我、江部、山田諸教授

河野、安井兩助手及び學生十六名出席、各教授のテーブルスピーチ等あり、頗る盛大意義深き會合であつた。

◇佛敎史學會

●新入生歡迎會

四月十七日午後六時

新京都(河原町三條)

新入會員 四名

出席者 松本、日下兩教授及學生十四

名

席上、松本、日下兩教授の佛敎史學研究の重要性と其の新しき態度に就いて示唆あり、一同清新な抱負を語りつゝ散會。

●春期見學旅行(紀伊半島一周)

引率者 日下教授、參加學生 十名

五月二十九日 午前六時二十分京都驛

出發、紀三井寺、施無畏寺、興國寺

見學、御坊町にて旅行最初の日の塵

を拂ふ。

五月三十日 道成寺 熊野那智神社

(那智山) 熊野速玉神社(新宮)を見

學、神佛混合の由深き此地感無量た

り。

五月三十一日 本宮坐神社見學 熊野

三社の見學を終へ、鬼が城の名も珍しき紀伊木本にて今回旅行最後の夜を波の音と戯る。

六月一日 尾鷲經由 宇治山田着 内

宮、外宮を參拜、午後十時京都驛にて、見學旅行それらの收獲を祕持して散隊。

哲學研究室

社會學會

重松教授並に新入生歡迎會

日時 五月十三日(水) 午時六時より

場所 三條京極森永

新入生 榎津明信、下間京春、呼野徹

の三君

出席者 福井教授、重松教授、池田先

輩、學生、全員九名

福井教授を中心に種々懇談、和氣藹々の中に八時閉會す、尙福井先生の提議に依り社會學會卒業生名簿を作成することとなる。

第一回例會

六月二十四日(水)午後三時 於第三教室

一、「群集論」

學三 青山秀芳君

一、「權威についての一考察」

學三 小原 力君

出席者 福井教授、池田先輩、他學生

七名

第二回例会

七月八日(水)午後一時 於第十一教室

一、「戦時下に於ける労働政策」

學三 鹿崎 章君

一、「都市犯罪に就いて」

學三 波來谷勝始君

一、「我國の國家發展性と人口問題」

學三 和田喜祐君

出席者 福井教授、重松教授、池田先輩、他學生六名

(學二 佐藤記)

宗教學會

一、例会

時 五月二十一日以降每週土曜午後七時より

處 鈴木大拙教授邸

週毎に主題を轉移し、鈴木教授を中心

として、會員相互の意見交換をなす、必要により適宜講師を聘し、また會員の研究發表もこの機會を利用して行ふ、因にこの例會は特に鈴木教授の御厚意に負ふものであることを附記し、深く感謝の意を表する。

一、新入會員歡迎會

時 四月二十三日午後五時半より

處 河原町三條「新みやこ」

新入會員 瀧澤、深溝、山吹の三名

出席者 杉平教授、坂本教授、外學生

十一名

一、第二回横川忌、五月二十七日

正午洗心閣に於て追悼讀經、夜七時より鈴木教授邸を煩はし追悼の夕を催す、

出席者、鈴木教授、杉平教授、福井教授、坂本教授、無門氏、外宗教學會學生全員

西哲、倫理學會

宗教學會 合同主催

一、柳田、多賀教授歡迎會

時 五月二十五日午後五時

處 矢尾政

出席者 柳田、鈴木(貞)、朝永、鈴木

(弘)、立花、大塚、三井、大友、坂本の

諸教授、金松、小田、横山の諸氏、及學生十五名

柳田教授の挨拶に始まり、諸教授、學生間に隔意ない談話が交された。就中、

話題の中心となつたのは本學特有の學風であつて、様々な角度から示唆深い觀察批評が試みられ、一同深く啓發されると

ころがあつた、最後に鈴木(弘)教授は挨拶に兼ねて最近の所懷を披瀝され、特に

感銘深いものがあつた。

國史學會

昭和拾六年度卒業論文第一回發表會

十一月二十五日 於第八教室

一、平安後期の念佛思想について

中村 專修君

一、尾張大國雲神社の一考察

丹羽 康君

一、神道五部書の研究

中戸 彰善君

出席者 德重教授、瀧先輩、學生二十一名

○第二回發表會

十一月二十九日 於第七教室

- 一、存覺上人と本願寺教團 竹井一實君
- 一、源賴朝の生活と信仰 間下達示君
- 一、元祿前後に於ける町人生活 近松淳一君

出席者 德重、藤島教授、柏原先輩、學生七名

○卒業生送別會

十一月廿九日六時半より 於八光園

德重教授、柏原先輩、學生二五名
尙同席上記念撮影をなせり九時盛會裡に解散。

○鷹ヶ峯金蓮寺史蹟見學

二月廿二日(日) 午後一時

德重教授指導 學生 鹽井、橘、大野木全、菊池

一、淨阿二祖上人自筆和讃

一、後小松天皇御宸翰

一、足利將軍二代御教書

一、兪法師畫彌陀像

その他數十點見學五時解散

○新入生歡迎會

五月二日六時半 於矢尾政

出席者 德生、藤島、土居、村田教授、

龍、仲野、相原、柏樹先輩、學生三十四名

新入會員 比叡噺、花房義靜、後藤祐廣

襟噺、仁科周典、宮田誓雲、安藤厚、

朝良廣隆、最上美好、草間知成、宮城

龍曉、山香茂、藤法良教、桑原教惠、

保川了教

○山陽地方史蹟見學旅行

六月三日

京都驛↓加古川(尾上神社、鶴林寺)↓

姫路(射楯兵主神社、姫路城)↓城越(大

避神社、妙見寺)↓赤穂(城址、大石神社

花岳寺)↓御崎(伊和都比賣神社)↓岡山

(後樂園)↓吉備津神社↓金光教本部教廳、

↓草戸(明王院)↓朝(阿伏觀音、福禪寺、

招名前、神社安國寺) 六月六日五時歸途

につく。

引率教授 德重教授、藤島教授、學生

川崎、大藤、本田、襟、花房

○史蹟見學旅行報告會

六月十二日 三時十分より 八教室

一、鶴林寺

二、姫路城

射楯兵主神社

襟

曉君

花房義靜君

三、赤穂雜感

川崎信曉君

四、後樂園
金備津神社

本田 廣君

五、明王院
盤臺寺

大藤久二男

六、會計報告

出席者 德重、藤島教授、學生十七名

(六月十五日木全記)

東洋史學會

五月十二日午後一時より、東洋文化研

究所を見學す。續いて五時より、一休庵

に於て、新會員歡迎會開催、宮崎、諏訪、

野上、愛宕教授及び畑中先輩、外學生八

名出席。

尙、東洋史學會に於ては、毎週木曜日午

後七時より、「二十二史劄記」の輪讀會を

開きつゝあり。